



人と農と環境をつなぐ技術を考える

はじめての渡航・シンドの地へ

国際耕種は、30年以上前から農業分野における開発調査、技術協力プロジェクトを中心にパキスタン国(パ国)に関わっており、近年では、2019年から2023年までバロチスタン州でのJICA技術協力プロジェクトに携わった。今回、2024年からシンド州を対象にした、JICA 小規模園芸農家支援プロジェクトに参画する機会を得た。

パ国最大で世界有数の巨大都市であるカラチを擁するシンド州は、州面積が九州の約4倍近くあり、インダス川流域平原(インダス平原)に位置する。インダス川といえば、世界四大文明の1つであるインダス文明の都市遺跡「モヘンジョ・ダロ」が頭に浮ぶだろうか。さらに南アジアにイスラームが最初にもたらされた地でありながら、パ国のヒンドゥ教徒の9割以上が暮らす州でもあり、豊かな歴史と多様な伝統を持つ地域である。

シンド州は砂漠気候に属し、年平均降雨量は150mm程度で、農業生産には灌漑が不可欠である。インダス平原では、インダス川や山岳部の集水域を水源に、5000年来にわたり洪水や湛水を利用した溢流灌漑(Sailaba irrigation)が行われてきた。その後イギリス統治下の1930年代、サッカー郊外のインダス川に堰が建設され、近代灌漑網が整備されたことで、乾燥した不毛の地を一大農業地帯へと変貌させた。今日までの同州の農業生産は、主要作物であるコムギやコメなどの穀物と、サトウキビや綿花などの工芸作物が大部分を占め、パ国GDPの11%に貢献する穀倉地帯となっている。



整備された灌漑用水路

シンド州の作期は、Kharif期(4月-9月)と呼ばれる降雨がある時期と、Rabi期(9月-3月)と呼ばれる乾期の2つであ

る。サトウキビやコムギは、同州全域で栽培され、綿花やコメは北部と南部地域での栽培が盛んである。野菜や果物の生産も盛んで、トマト、マンゴーなども主要な産地が形成されている。マンゴーは世界有数の産地で、輸出もしている。

今回のプロジェクトは、シンド州の状況に合致した市場志向型農業を推進する普及活動を導入・促進し、小規模園芸農家の生計向上を目指すことが主なテーマとなっている。園芸栽培担当、ICT/モニタリング担当として、園芸栽培に係る技術指導、ICTを用いたモニタリングシステムの構築とモニタリング活動の指導・支援等が、我々の主な役割となる。



トマトの畝間灌漑(奥はバナナ)

先のパロチスタンでの業務では、治安の制約から、農村地域への訪問は実現しなかったが、本プロジェクトで初めて訪問することができた。パロチスタン南部地域の普及活動でよく報告があった、湛水害や塩害等を至る所で目にし、現場の課題を肌で感じることができた。また、訪問先で出会った地主と小作農家たちが対等に意見を交わす場面も見受けられ、これまで接していた情報から思い込んでいた、地主と小作との関係とは異なっていることに気づき、生きた情報を現場で得ることの大切さを改めて感じた。

嬉しいことに、これまでのパ国プロジェクトの仲間達と再会することもできた。今後、様々な紆余曲折を経験するだろうが、心強いパ国の仲間達に支えられながら、我々の他州でのこれまでの知見を活かし、この新天地を楽しみたい。

(2024年5月中村)